

東アジア児童文学のゆくえ②

—台湾児童文学のアイデンティティ

成實 朋子

*中国ざらいと台湾ブーム

このところ、日本人の中国ざらいはすっかり定着してしまつたようだ。日本の特定非営利活動法人・言論NPOは、昨年「第十二回日中共同世論調査」を発表したが、ここでは日本人の中国人に対する印象は、「良くない」（「どちらかと言えば良くない」を含む）が九割を超えていた。訪日中国人旅客は激増しているが、中国へ渡航する日本人旅客も激減していて、日本政府観光局（JNTO）のホームページを見てみても、二〇一一年には約三六六万人であった訪中旅客は、二〇一五年には約二五〇万人にまで減っている。

おそらく二〇一二年の尖閣諸島問題を発端とする日中関係の悪化、そして大気汚染や食品安全等に対する懸念が影響しているのだろう、ここ数年、中国行きの飛行機に乗ると、周りには中国人旅客ばかりで、日本人の姿はちらほらとしか見えない。テレビの旅番組で中国を取り上げることも

めつきり減つた。中国の食材を嫌って、日本から大量の食料を携えて赴任する駐在員家族も多いと聞く。そう言えば、「中国に不満があるので、辞めます」と言つて日中児童文学美術交流センターを退会した人もいた。日中児童文学美術交流センターは、中国政府と何の関係もないのだが……。

代わりに台湾へ渡航する旅客は増えているようで、先のホームページでも、二〇一一年は約一二四万人であつた旅客数は、二〇一五年には約一五九万人に増加したとある。台湾は親日的であるというイメージの影響もあつて、日本人旅客は政治的な動静に左右されることの多い中国や韓国を嫌い、台湾に乗り換えているのであろう。蔡英文政権になって、中国は台湾への旅客制限を行うなどの圧力をかけているが、堅調な日本人旅客の数が、台湾の中国旅客激減のダメージを和らげている格好である。

このように、日本における「台湾ブーム」は継続中で、台湾旅行を特集するメディアも多いのであるが、日本人観